

季刊

音楽文化の創造

音楽文化と生涯学習の総合情報・研究誌

2010
Summer

57

特集
音楽の伝統の継承と革新



cmc

Creating Music Culture

歌心の伝統とオペラ創作の革新

指揮者／作曲家

平井 秀明

私は本業の指揮活動と共に、幼少時代より作曲も続けており、近年オペラ「かぐや姫」、オペラ「小町百年の恋」などの大規模作品を書いている。今回、作曲家の視点で執筆依頼を頂いたが、奇しくも音楽一家の三代目に生まれた宿命から、演奏家に至った道のりを含め、家族から継承した「歌心」の伝統、東西伝統の融合と革新などについて述べることにしたい。私にとり演奏と作曲は、一芸術家として一心同体の関係にある。音楽に囲まれて育った家庭環境、次いで、創作活動における「伝統と革新」について、自作オペラを例に挙げて論じたい。

我が家の伝統の継承

幼少時代は、家での音楽練習より屋外で大

暴れする方が多く、両親や祖父母を手こずらせることもしばしばだった。作曲家の祖父、康三郎は叱ると震え上がるほど恐かったが、工作、絵画、習字、デザイン画など、音楽以外の幅広い芸術的センスに長け、時には得意の工作で孫のために刀、兜、手裏剣などをこしらえてくれ、自作草稿表紙の巧みなデザインなども含め我が家はオリジナリティの香りに溢れ、芸術家の豊かな想像力が実生活の中に既に存在していたのである。

私は祖父の「とんぼのめがね」、「スキー」、「ひな祭り」など自作童謡の弾き語りであやされ、初期音感教育を受けるうちに、自然と音楽への興味も沸いたのである。「想像力」や「創造力」を養うためには音楽に固執せず、人間としての様々な体験が大いに役立ったと思う。祖父母や母の手ほどきでピアノとヴァイ

オリンを始めたが、チェリストの父・丈一郎に憧れて、ヴァイオリンを逆さまにしてチェロの真似事をするようになり、小学校入学と同時に念願のチェロを始めた。

我が家では音楽の道の厳しさを知るがゆえに、三代目も音楽家になることに家族は猛反対だった。音楽は一生かけて奥深くまで掘り下げるべき芸術で、一方、国際人としての視野を広げるべきだという方針であった。

伝統の継承には自ら相当の覚悟を要することは、歌舞伎界、角界なども変わらない。私は、父の恩師で敬愛する巨匠カザルスが、音楽を通じて国際平和に貢献した人生観に感銘を受け、心の奥底には音楽家への夢を密かに温めつつも、国際政治の勉強のため渡米し、ニューヨーク州ロチェスター大学政治学科に入学した。



チェコ・ブラハの殿堂、スメタナホールにて(筆者)

自らを試す意図もあり、併設のイーストマン音楽院で指揮の授業を取ったことが一大転機となり、紆余曲折を経て、指揮者への道を切り拓くことになる。欧米の歌劇場で活躍し、厳格で有名なエフロン先生に最初の授業で認

めていただき、指揮者になるための本格的な厳しいレッスンが始まった。政治の勉強で寝る暇もなく、音楽の勉強に割ける僅かな時間はまさに至福の時である反面、集中して吸収すべき真剣勝負であった。

一年間基礎を徹底的に叩き込まれた後、「本気で指揮者になりたいのなら、自らオーケストラを作るほどのエネルギーと情熱がなくてはやっていけない」という師匠の言葉に、この道の厳しさを改めて痛感した。しかし、音楽への情熱が人一倍強かった私は、その言葉を真に受けて、夏休みの間にワシントンD.C.のジョージタウン大学で経済学の夏期講習を受ける傍ら、近郊在住若手音楽家を朝から晩までリクルートの末、遂にオーケストラを結成し、指揮者デビューを果たした。

ひと夏限りのつもりが、幸い演奏依頼が舞い込み、新学期が始まるとオーケストラの練習継続のため、月二回ほどニューヨーク州北部から首都ワシントンまで、週末に車で往復十五時間、^二「二足のわらじ」の学生生活が始まった。今となれば無謀とも思えるが、音楽家を目指す強い志が、まるで血が騒ぐかに溢れ出て、今話題の坂本龍馬の如く若き情熱一筋で邁進していたのであろう。

私は、いつも大きな夢を追いかける楽道家だが、これも我が家に流れる土佐の気質を引

き継いでいるのかもしれない。祖父に加え、ピアニストの母方の祖父も高知出身であるため、七五%は土佐の血が流れているためであろうか。

オペラ「かぐや姫」誕生秘話

一九九二年二月、ニューヨークに留学中、日本文化紹介も兼ねて「かぐや姫」のオペラ化を思い立った。まずは、かぐや姫が月へ帰る運命を、翁と^{きょうな}姫に告白するクライマックスを選んで作詩すると、泉が湧き出るが如く楽想も浮かび、「別れの Aria」が一晩で誕生した。おじいさん、おばあさん、あなたに出会えて幸せでした。で始まる歌詞には、私自身祖父母と共に育ち、アメリカから故郷や家族を想う感情とも重なっていた。

翌夏、首都ワシントンでの新鋭黒人ソプラノによる「別れの Aria」初演は、思いがけず地元紙第一面をカラー記事で飾るなど脚光を浴び、その後オペラ化へのリクエストが寄せられた。

二〇〇三年二月、^三三世代で楽しめるオペラの創作という夢を実現すべく、全二幕約九十分のオペラ「かぐや姫」を書き上げ、東京で初演した。日本最古の物語にして、未だ

解明されない宇宙の神秘を描いた原作（「竹取物語」は、壮大なSFファンタジーである。音楽面では、五音階による旋律や短歌に基づくアリアなど、和風テイストを織り交ぜつつ、地球人と宇宙人の交流というユニヴァーサルな視点で、国際的にも受け入れ易い西洋の伝統との融合を図った。

「親しみやすいメロディー」をモットーとする一方、自らがけた台本にも工夫を凝らしたが、日本人なら原作を誰もが知るメリックトは大きい。オペラへの敷居をまず一つ取り払ってくれること、世代ごとに異なる楽しみ方が出来ること（子供にはおとぎ話、大人には平安貴族のロマンス、お年寄りには人生の教訓、歴史・文化的背景、舞台衣裳、和歌の探究など）、あるいは、孫を連れて慣れないオペラに出掛けた方が、「即席解説者」として孫にオペラを語ることさえ可能である。

原作で描かれない姫の幼少時代を加え、姫の子役、友達、母親達を登場させ、感受性豊かな子供たちに、生の音楽を体感する機会を提供する。また、子育て世代の母親達を支援する意味では、むしろ単なるオペラ鑑賞に留まらず、親子オペラ出演という「夢の体験」を通じた貴重な思い出の共有も実現出来る。さらに、合唱に祖父母も参加し、実際に三世代で共演した例もあり、まさに「市民参加型」

オペラである。

なお、上演地のご当地ネタを盛り込むなどフレキシブルな面も持ち、常に進化するオペラに育っている。オペラを通じた三世代間の交流で、希薄となりつつある現代の家族の絆を強める一助にでもなれば、と願っている。ちなみに、日本各地で再演を重ね、海外でもキャンベラ（オーストラリア）／2006日豪交流年、記念公式イベント）、プラハ（チェコ／2009年）で上演され、いずれの公演も地元メディアで最大級の評価を得ており、期せずして国際交流の輪が大きく広がっているのは、作曲者として殊の外嬉しい。

オペラ「小町百年の恋」について

オペラ「小町百年の恋」は、「第二十三回国民文化祭・いばらき2008」委嘱で作曲と台本を手がけた、全三幕四十七曲、上演時間約二時間三十分のグラント・オペラで、「男女・夫婦愛」（男体山・女体山からなる筑波山のイメージ）と「平和」が、根幹を成すテーマである。原作「筑波山愛ものがたり」（佐賀純一著）収録の短編約三十作より、防人にまつわる「百年の恋」（第一幕）、「小野小町」（第二幕）、「茨城県命名の由来に因んだ「貝と茨」（第一幕）、「仙人伝説」（第一・二幕）を融合し、

台本化した。

台本の特色は、世界に誇る日本文化の象徴である短歌に着目した点で、原作収録の和歌に加え、万葉集、古今和歌集などより二十一首厳選して盛り込んだ。「花の色は」などの恋歌で有名な小野小町作六首、万葉一のロマンチストと称される歌人、高橋虫麻呂作の二首、防人の歌などである。

さらに、「筑波山（筑波嶺）」を詠んだ和歌七首については、かつて（東の筑波、西の富士）と崇められ、「万葉集」の題材として富士山十五首を遙かに凌ぐ三十八首も詠まれた名峰「筑波山」の歴史的価値を再認識する願いも込めた。世界の日本研究者をはじめ、和歌を介して日本文化を探究する意義や、日本オペラの独自性や革新性の新たな評価や理解へ繋がることを熱望している。

作曲面の工夫例として、第一幕では、日本特有の自然信仰を象徴した混声合唱「筑波山」、茨城県のわらべ歌を児童合唱に取り入れ、忘れがちな伝統や風習の次世代への継承を意識した。また、三人の妻たちに夫らが残した「防人の歌」に基づくアリア三曲の各主題が、続く三重唱で三声に重なる高度な仕掛けを擁し、テノールも加わりフーガを伴う四重唱に発展させ、防人の苦悩を深みある音楽語法で表現した。



2003年、オペラ「かぐや姫」世界初演の舞台より

第二幕は、コミカルな茨城弁を駆使したメロドラマや三重唱で、方言特有のユーモラスな素材を十分に生かし、閻魔大王の迫力溢れるアリアや、踊り子の妖艶なダンスを伴う第二幕フィナーレ「火祭りの踊り」では、西洋の音楽や舞踊の伝統を反映し、華やかな見せ場を形成した。

第三幕では、小野小町のアリア「夢の歌」(小町が恋する人との夢の逢瀬を、恋焦がれて詠んだ三首(夢の歌三部作)や二重唱「花の色」が重要な位置を占めている。祖父は代表作である三部作「平城山」、「甲斐の峡」、「九十九里浜」で、北見志保子作の短歌を複数組み合わせ、連作短歌による歌曲形式を我が国で確立した。その流れを汲みつつ、私は小町作の〈夢の歌三部作〉を基に長大なアリアを作曲した。

和歌は世界に誇るべき最高級の芸術であり、僅か三十一文字の定型詩で描く豊かな情景や感情、深奥なる含蓄は、少ない言葉数を活かしたメロディックな音楽の背景で、実に多くを自ずと聴き手に語るのである。西洋音楽と融合させたグラランド・オペラの中に、隠し味の如く散りばめられた偉大なる先達らの名歌が、聴き手の理解の度合いが深まるほどに、素晴らしき和の伝統が西洋で誕生したオペラの中に浮かび上がってくるであろう。

祖父は、まだ二十一歳頃の初期の作品「ゆりかご」に、一生涯強い愛着を抱いていた。作風の変遷を経て生涯五千曲以上の作品を残したが、「ゆりかご」を一つの原点として常に一貫していたのは、「美しい旋律や和声」を特徴とする「歌心」である。作曲や演奏、声楽、器楽を問わず、聴衆の心を揺り動かす、感動を生むのに不可欠な秘薬とも言えよう。

祖父、父、そして私も、それぞれの作風は当然個性が反映されているが、この「歌心」は共通して脈々と継承され、我が家の伝統として、各々の個性により革新され、作品誕生へと繋がっていくのだと思う。